

平成二十八年七月二十四日

今年始め、時の經濟再生擔當大臣甘利議員、業者に不當便宜を圖るの疑を被り、辭任に至れり。それが祕書、權力を笠に獨立行政法人都市再生機構（UR）へ、一業者に格別の取扱を迫りたる由。當時、メディアは大臣及び業者の非を唱ふる多く、URにつきて言ふ少し。

斯様の汚職事案、古今東西數多あれどもその報道パターン、政治家を最も惡とし、次が業者。今次のURの立場、即ち行政側を寧ろ被害者風に扱ふ傾向あるも 我思へらく、筋を曲げて不正をなしたるURの罪、最も重しと。壓力に屈するに涙を吞むと雖も、同情すべきにあらず。

數ある業者のうち、いづれを採り、金をいくら拂ふか、それを決むるは行政内部の擔當部門擔當者、即ちUR職員なり。行政の金庫の鍵は職員の手にあり。政治家いかに強大なる權力を有し、いかに聲高に求むとも、金庫の鍵開かざれば始らず。換言せば、汚職行爲完遂の成否はUR職員の手にあり。これ職員の責任最重要なる所以なり。

職員が外部内部の干渉に屈して不當處理するは何故にか。政治家又はその意を受くる上司の壓力に抗する能はざるゆゑなり。何故に抗すること能はざるか。彼等の意に沿はねば身に不都合生ずるを知ればなり。政治家が組織に容喙し、意に應ぜざる職員の左遷降格減給を齎すがゆゑなり。然なることに屈する職員の有様、これを即ち保身と言ふ。保身がため、元は血税たる公金を不正に費消するなり。

かかる保身あるべからず。筋を通したる結果、報復ありとしても馘首には至るまじ。左遷なんどの不都合、何のことかある。甘んじて受くべし。思へ、身に何ら落ち度なくとも會社倒産して職を失ふ民間人の例、枚擧に遑なきを。

壓力に負けて不正取扱する公務員を一律無期懲役など嚴罰に處すれば、汚職事件、激減すべし。不正に對する罰が、壓力側の報復よりも格段に酷しくば、保身のためにも適正取扱せざるを得ず。

汚職背任、官にのみあるにあらず。我、長年の金融機關勤務中、自分や周圍への壓力脅迫誘惑あるを多く見つ。その元は、政治家、出入り業者、社内特定グループ、彼等と結託する上司先輩たり。官なれ民なれ、組織に居る者の殆どは各々それらと苦闘しつつ日々の職務を誠實に果し居り。政治家と頻繁に對峙する行政職員の勞苦、民間のそれとは異なるべけれども、彼等はその對價として、民よりも身分安定し、勤務の好條件を既にして有す。矜恃、保つべし。

職員自ら地位を利用して甘き汁を吸はむとするは論外なり。保身に加へ、進みて利得響應を求むる輩ある時、不正起き易し。

今月、UR職員二名、收賄響應を理由に懲戒處分を受け、自主退職せりとの報道ありき。

（平成二十八年八月九日受附）